

世界なんてあつという間に変わるのだ。

同じことを繰り返すばかりの平日と、泥のように眠るだけの休日を消化するだけだったあの日、たまたま深夜に目が覚めた。窓の外には眠りきれいな部屋が灯りが点々と散っていて、残念ながら世界が息をしていることを教えてくる。こんな時間に起きたつてどうするのかとスマートフォンの時計を確認すると、カレンダーが告げる『今日』は赤字になっていた。

「なんか面白いもんじゃないかな」

どうせ休みなのだ。少しくらい生活リズムを崩したつて困りはしないだろう。電気をつけると光が目刺さつてしまいた。ぎゅうつと瞼を閉じて手探りでリモコンを探し、適当にテレビをしゃべらせる。よくわからない通販番組、映画の番宣、なにもやっていない。片っ端からチャンネルを替えていくと、笑い声が起こる。

夏樹

「お笑い？ こんな深夜に？」

テレビの画面は見たことのない番組名と、これまた見たことのない若い男の人を数人映していた。真ん中にマイクを一本立てて喋っている人たちと、それを聞いている人たち。チャンネルはローカル放送局だからそんなに有名な人を使っているわけではないだろう。それでも通販番組よりはまあ、とりモコンを放り出し、枕を抱える。背景の大きなモニターに、コンビ名であろう単語がポップな字体で書かれていた。

「階段、シックスティーン……」

やっぱり聞いたことないコンビ名だ。見た目普通のお兄さんが二人で、へらへらと雑談のように漫才をしている。インパクトも大声も動きもない。それでも一挙手一投足を追いかけ、彼らの雑談に聞き耳を立てるように、私はテレビにかじりついていた。もういいです、どうも

ありがとうございました、と右側の男が声を上げると、二人が揃って丁寧な頭を下げた。いや面白かったねえと司会らしき男が誰に言うでもなく呟いて、それじゃあどんどんいきましようとしてモニターの文字が変わる。でも私はまだ先程の彼らが頭にいた。飄々とボケを積み重ねていた彼らの顔がまだ消えていなかった。

「階段、シックスティーン……」

だって確かに運命だと思ったのだ。

同じ事と言ばかりの毎日がひっくり返るような。

小さな画面を駆使して彼らのSNSアカウントを探して、とりあえず登録だけしていた自分のアカウントでフォローをした。騒ぐ心臓が気持ちを逸らせる。彼らは、正確には階段シックスティーンは自分達の出演情報を自立つ位置に固定していたので、ありがたく最近の動向を追った。どうやらあの番組のようにテレビ出演をすることは稀らしく、聞いたこともない名称と会場らしき単語が横並びでずらつと書かれていた。コンビ歴十年目が目ごれほどの立ち位置なのかはわからないけれど、少なくともテレビを主戦場にはしていないだろう。

「会場、も、……近いな」

適当に単語で検索すると、以外にも職場から近い地名がヒットした。新宿とか中野とか、普段何気なく通っている場所。彼らの出演情報を見ると、一週間後、休日の宿でライブをする旨が書かれていた。一週間後、休日の新宿なら問題なく行ける気がした。前売り券は、まだ、ある。

勢いでチケットサイトのページに飛び、必要事項を打ち込んでいく。『予約ありがとうございます』の文字を見て、無意識に入っていたらしい身体の力が抜けた。今日はもう、眠れそうにない。

地図アプリを手元に新宿駅東口から少し歩いて、左手に西武新宿駅が見えてきたところで、小さな看板が目に入った。同じ会場名だ。十数人が一列に並んでいて、スマートフォンを眺めたり連れ合いらしき人と会話したりしている。ああ意外と人がいるんだ。

勢いで予約した後情報を確認したら、どうやら階段シックスティーン以外にも多くの芸人がこのライブに出るのだとわかった。ほとんど名前も知らない人たちだ。ここで待つ人たちはいつ彼らを知ったのだろう。

「それではお待ちせいたしました！ 整理番号1から10までのお客様をご案内いたします。チケットを表示していただいて、受付でお名前をおっしゃってください」

堰を切ったように数人がドアの奥へ流れ込む。整理番号つてなんだ、とチケットを表示すると『84』ときちんと記入されていた。20まで、30までと続々と呼ばれ出す人々は老若男女様々だが、一様に輝いた瞳をしている。三十代くらいの男の人が多いかな、でも女の人もわりと多いんだな。適当な位置に並んできよるきよるしている、不意に後ろから声をかけられた。

「何番ですか？」

「え、あ、84です」

「ありがとうございます」

女性はそのまま私の後ろに移動して、後ろとも同じ会話を繰り返していた。何番ですか？ 92番です。ああ私89番です。そうですか、どうぞ。

「80から100までのお客様どうぞー！」

一気に人の波がざわめいて、合わせるように私も歩を進める。

「こんにちは！ お名前教えていただけますか？」

「あ、田中です」

田中、たなか、とノートをなぞって、「ああ田中さんですね。……はい、大丈夫です。こちらをどうぞ」と紙チケットと複数枚のチラシを渡される。流れに沿って奥へ進むと、ずらりとパイプ椅子が鎮座していた。中央、二列目、通路側は既に埋まっている。適当に後ろから三列目にもぐりこんで、隣の人に頭を下げてパイプ椅子を軋ませた。続々と入る人に「最前列開いております！是非どうぞ！」とスタッフの声をかけている。

先ほど渡されたチラシを捲っていくと、公演のアンケートが挟まっていた。それをよけておいて一応チラシに目を通す。単独ライブ、事務所ライブ、ユニットコメントなるもの。名前を知っているものから知らないものまで様々なチラシがある。複数の事務所がそれぞれライブをしているなんて知らなかった。色とりどりのライブ名を撫でると、不意に視界がまばゆく光る。

「えー皆さんこんにちは。本日は『笑人』に足を運んでいただきありがとうございます。ここから簡単に注意事項を説明させていただきます！ まず一点目、携帯電話は音が鳴らないように設定をお願いいたします」

顔を上げると眩しいステージの上でスタッフが注意事項を説明していた。携帯電話がマナーモードになっているかを確認して、鞆に仕舞い込む。

「二点目、写真撮影はエンディングのみでお願いいたします。その際シャッター音はお切りください。三点目、ライブ中の飲食、会話、喫煙はご遠慮いただいておりますので、予めご了承ください。では、もう少々お待ちくださいませ」

スタッフが捌けた後も、照明と音響はにぎやかなままだ。アップテンポな音楽が耳を通り抜けていく。故郷に

は緑を、なんて知らない音楽が。

視界がゆっくりと暗くなって、音楽のボリュームが高まる。ジェットコースターが下る直前のような高揚感。瞬きすらも惜しんでステージを見つめていると、乾ききった世界に涙がにじむ。

「はい、どーも！」

割れんばかりの拍手とともに、階段シックスティーンがマイクを持って現れた。照明の銃撃戦。マイクに繋がったわんだコード。幕裏からのぞく知らない顔。ここで死ぬのならそれでもいいくらいそれは天国に似ていた。

彼らはそのままMCをこなして、数名のネタを幕裏で見、そして真ん中に置かれたマイクの前で私の知らないネタをテレビと同じように飄々とやっつけてける。たくさん芸人が彼らと同じようにマイクの前に立っていても、彼らほどは輝かない。温厚そうに笑う眼鏡をかけた佐藤と、三白眼をきらきら輝かせて笑う潮田は、どこにいたって光をたたえていた。

エンディングで皆が一斉にカメラを向けているが、私はどうしても指が動かせない。一瞬を切り取るために目を離すことが惜しい。白くひかる照明の眩しさも、マイクのハウリングも、佐藤のまばたきも、潮田の肺の動きも、この熱も写真なんか閉じ込められるわけがない。チラシが歪む。手が震える。目の前に世界がある。

変わり映えのしない平日と泥のような休日は、二千元でお釣りがくる金額の二時間で簡単に色をおぼえた。テレビとは比べ物にならない音量の音が鼓膜を震わせて脳をかき乱す。ありがとうございます、と一斉に下げられた頭の、つむじの形まで見逃したくなかった。あの日に目が覚めてなかったら、ザッピングをしていなかったら、私はこの世界を見逃していたのだ。

光を追いかけて半年ほど経つと、SNSでは年に一度の大きなお笑いの大会の話題で持ちきりになった。準々決勝で落ちると動画サイトでの敗者復活戦があるんですよ、一番再生回数が多いコンビが復活するんです。そう教えてくれたフォロワーさんは、私とは違うハイテンションな漫才のコンビを追いかけている。

『でもあれ、人気投票みたいなものだから、結局ファン之母数勝負なんですよね』

新宿、中野、池袋、高円寺、阿佐ヶ谷、下北沢。暇さえあれば平日も休日も足繁く通ったおかげで、なんとなく階段シックスティーンの立ち位置は分かる。佐藤さんも潮田さんもそれなりにファンはいるけれど、劇場に出ずっぱりのコンビやテレビに引つ張りだこのコンビとは違う。トークライブも数十人規模の会場で行うし、いつも教席空いている。チケットの即日完売も見たことがない。

「田中さん、この後飯でもどうですか？」

「あ、ごめんなさい。今日は用事が……」

「そっか残念。じゃあまた」

誘いを断るのももう何回目だろうか。突発的なお誘いじゃなければ、あとトークライブの日じゃなければ、あと事務所ライブの日も外してくれば、あと配信の日も外してくれたら行けるんだけど。ごめんなさい、と心の中でもう一度謝って鞆を肩にかける。今日は池袋。

慣れた道のりを辿って会場に着くと、人はまばらだった。そういえば今日は他事務所の企画ライブで大人気のコンビ同士がツーマンをすとかなんとか、SNSで見かけた気がする。パイプ椅子も結構空いていて、いつもどおり二列目の通路側に腰掛けた。チラシをぎつと捲つ

て、毎月観ている事務所ライブの日付を確認する。初週の水曜日。カレンダーアプリに登録していると、出囃子がぐんと大きくなった。この瞬間が一番好きだ。心臓の拍動が身体全体を支配する。

数組の若手がネタを終えると、やっと階段シックスティーンの出囃子が響いて彼らが飛び出した。佐藤さんのネクタイがすこし曲がっているところがかわいらしくて頬を緩める。

「俺さ、ガソリンスタンドでバイトしたいんだよね」

掴みの台詞でわかるほど何回も見たネタだ。一週間前の下北沢でも同じネタだった。今日はどこを変えてくるのかな。ネタの流れを思い返す。

間の小ボケをいくつか変えながら、いつも通りお辞儀をして彼らは捌けていった。最前列の何人かも併せて通路に出ていく。暗がりでも動く頭に一瞬視界が塞がり、どかんと湧き上がる歓声に乗り遅れる。やつと明るくなった視界に新年の番組で跳ねたトリオがいた。今やテレビに引つ張りだこの若手トリオだから黄色い歓声も多い。一挙手一投足に笑いが起きて、「かわいい」なんて声はどこからか聞こえた。それはネタに関係あるのか？ 暗転と同時に耳を裂くような拍手が鳴り響いて心臓がざわめく。結局ファンの母数勝負なんですよ、とフォロワーさんの言葉が浮かんで消えた。

終演のアナウンスが鳴り響いて、早々に荷物をまとめて腰を上げる。人でごった返す出入口を何とか潜り抜けて駅に身体を向けると、会場の横手で人が数人集まっていた。背の低い女性たちから飛び出すように、潮田さんの顔がある。スマホのシャッター音。両手の紙袋。ここやかな顔。ネタだけを楽しみに来ているお客さんだけではないことを、知らないわけではなかった。

「潮田さん、これの前おっしやつた煙草です」

「あーありがとうございます！ 嬉しいです」

「よかったです！ 写真お願いしてもいいですか？」

「もちろん」

声の大きな芸人と、負けんばかりに大声で話す女性。ゆるく巻いた茶髪を胸元で揺らして、ふくらんだ白い袖を手首で絞って、足首までのスカートを風に揺らしている。潮田さんほんとにかっこいいです、ととろけた声でのたまう姿から目をそらして、駅へと歩いた。

こういうのは階段シックスティーンだけの話ではない。それこそ人気芸人になるとプレゼントでトランクは埋まるし、出待ちはちよつとした行列が生まれる。ライブ後に出演者と撮った写真を載せているアカウントはさんさん見たし、その中に階段シックスティーンの写真だけであつた。分かつてはいるけれど、なんとなく胸につつかえる。

「あー……次で行こ」

もやもや歩いていたせいか電車を逃した。時刻表を見やるとたいして待たなさそうなので、乗車列に並んでおく。SNSのアイコンをタップすると、ライブの感想がずらつと表示された。階段シックスティーンのもの、そうじゃないもの。同じライブで同じ時間を共有した人の眩きにハートマークを飛ばす。そのまま自分も眩こうと文字を打ち込んだ。エゴサーチ用にコンビ名は検索除けをしない。除けなきやいけない想いなんてない。

『ワラナイ行ってきました。今日も階段シックスティーン最高！ なんか、この二人にしかない面白さって感じがすごく好き。全世界気つけ！』

ぼん、と電子の海に流して一息つくくと、電車の到着を知らせるアナウンスがホームに流れた。

更衣室のロッカーに隠れてスマートフォンを眺める。

カレンダーの今日の日付には、『テレビ出演』の文字が添えられていた。久々のテレビだ。初めて階段シックスステイーンと出会ったあの日から、そういえば季節はもう一回りしている。

「田中さんどうしたの、めっちゃスマホ見てんね」

「え？ あ、なんでもないです」

「デート？」

「違いますよ」

なあんだ、と先輩がからから笑って制服をたたんでい。同じことばかりの日常に色を差してみると、思ったより人は笑っていた。一年前は地球を能面ばかりが歩いていたのに。

「今日好きな芸人がテレビに出るんです。二十三時からいから」

「マジ？ なんていう人？」

「階段シックスステイーンっていうんですけど」

うまく咀嚼できない顔をして、ごめん知らないやでも見てみるねと曖昧に先輩が笑う。気にしないでくださいとこちらも微笑み返して、先輩に放送局を教えた。

本当に気にはしていない。ライブシーンで何度見かけても、世間の知名度はこんなものだ。たぶん先輩はお笑いがテレビだけの世界だと思っているし、今この瞬間爆笑を生んでいるライブ会場があることも知らない。事務所も一つだけだと思っている。いやむしろ事務所の概念を知らないかもしれない。そんなものだろう。だから気にしたって仕方ない。私だって同じだったのだから。

「じゃあお疲れさま、見てみるね」

「ありがとうございます。お疲れさまです」

手を振る先輩に会釈して、私も上着を羽織る。リアルタイムの放送に間に合うように、慌てて会社を飛び出した。彼らのブロックは二番目なので出番までには問題なく間に合うことなど知っていたけれど、急ぎたかった。

終業後のスーツ姿の人たちが、銘々の目的を持って道を踏みしめている。押しつぶされそうな満員電車も、つり革に掴まれずに空を切る左手も、今日は許せた。

「始まりました、若手登竜門！ この放送でブレイク芸人を発掘しましょう！」

帰宅して着替えもせずにテレビを点けると、始まったばかりだったようだ。ジャケットだけそのへんに放ってベッドに座り込む。久々のテレビだと思うと、なぜかこちらが緊張してしまっていた。出陣子もないのに心臓が高鳴っている。

数組ネタが通り過ぎて、やっと階段シックスステイーンの文字が画面に躍り出た。へらへら笑いながら階段を降りて、舞台上にすらりと立つ。スタイリッシュだ。ちょっと太ったけど。

「どうもー、階段シックスステイーンです！ お願いしまーす」

そこからは寸分の狂いもなくいつものネタだった。一ヶ月ほど前に死ぬほど見たネタだ。ずいぶんかけるんだなと思っただけれど、テレビのためだったか。でもあんなまじり揮っていい。まばらな観客の笑い声。嘘くさい音声の笑い声。わざとらしく笑うカメラに抜かれたひな壇。おぎなりの拍手に送られて、逃げるように階段シックスステイーンは消えた。

「……うん」

本当に気にはしていない。そりやもつと笑えよとか、ライブシーンだったら今大ハネだったんだけどとか、思

うところはたくさんある。でも今は、久しぶりにテレビに彼らが映ったことを喜びたかった。

『若手登竜門』の階段シックスステイーン、面白いなあ』SNSの海にボトルを流すと、魚が食らいつく。

『FF外から失礼します。私はあまり面白くなかったというか……彼らの限界を感じました。もう少しネタをブラッシュアップすると、また面白くなるのでしょうか』うるせえなFF外から失礼すんじゃねえ寝ろ。

黙ってそっとブロックして、点いているだけになったテレビを眺める。どっと笑い声が上がって、観客が手を叩いて笑う。誰がウケているんだろうと目を凝らすと、後ろ向きな漫才が売りのぴかぴか若手コンビだった。コンビ歴が、小学生と同じ分だけ離れている。同じ「若手」として登場することが不思議なくらいだ。

ライブシーンでは気づかなかつたけれど、若手がテレビに引つ張りだこの時代らしい。新宿では若手扱いされる階段シックスステイーンも、テレビに出たらよくわからないコンビ歴だけ中堅のくくりで、どうしようもないから若手として組み込まれているのだろう。頭ではうすうす気づいている。たぶん私よりも彼らのほうがずっと。

そのまま眺めていたら、テレビを闊歩している若手コンビが小さなトロフィーにキスをしていて、階段シックスステイーンは後ろで拍手をしていた。何も言わず、ボケず、ただ淡々とてのひら同士をぶつけている。

「寝るか」

ファンには何もできない。ただお金を払うことと、知名度を上げることしかできない。彼らの苦しみや悲しみや憤りを肌で共有することはできない。だって私が観る彼らは飄々とした階段シックスステイーンだ。それでも、その眼に光があるうちは大丈夫だと信じる、つもり。

今日は新宿。通い慣れたおかげで道順も覚えたし、西武新宿駅まで出ることも染みついた。雑踏の中を掻き分けて歩いていくと、向かいからスマートフォンを弄って歩いてくる男性がいやに目についた。リュックサックとガーマントバッグを持って、喧騒の中を漂っている。

佐藤さん？

声をかけそうになって、寸でのところで飲み込む。こんなところで声をかけても迷惑なだけだ。俯いてさっさとすれ違う。見つめていると目が合いそうな気がした。間違いない佐藤さんだ。舞台上と違って髪はセットされていないし私服のパーカーだけど、SNSに載せられていたいくつかの写真と同じものだった。雑踏の中でばちばちと輝いて見えるのは舞台照明でも陽の光のおかげでもない。

声をかけない代わりに踵を返してコーヒーショップに入った。二人ともよく飲むのだと配信で話していた豆と樋口一葉ふたりぶんの金券を購入して店を出る。紙袋をふたつ抱えると、腕の中の重みに心臓が跳ねた。会場でもいつも通りチケットを見せようとして、片手が塞がっていることにまごつく。恥ずかしい、というか知らず顔が熱い。ああこの人、という目で見られているのではないかと思うと顔を覆いたい。チラシも見ないで紙袋を抱き直す。痛いくらいの照明が紙袋を安っぽく照らした。

公演のアナウンスもMCのトークも何も聞こえない。聞こえないのではなく、両耳と脳が繋がってくれない。やっと現れた階段シックスティーンが上手く見られない。喫茶店のネタなのに、久々のネタだからちゃんと見たいのに。紙袋が存在を主張しすぎている。この後私はあの女性たちの一人になるのだ。

終演と同時に飛び出して、数人がたむろしている場所に近づく。右往左往していると、大きな紙袋を抱えた女性が「出待ちですか？」と声をかけてくれた。

「はい、そうです」

「だったらここでの出待ちは禁止なので、あっちの路地の隅まで行きましょう」

「ありがとうございます」

そのままついていくと先程よりたくさんの人だかりができていた。路地裏の隅の方では、既に黄色い歓声が上がっている。

「どなたの出待ちですか？」

「階段シックスティーンです」

「あー、たぶんまだ出てきてないと思います。……はっちいさん！」

はっちいさん、と呼ばれた女性が、わーおひさしぶりですと紙袋の女性に手を振って駆け寄った。

「お久しぶりです。階段シックスティーン出ました？」

「まだじゃないかなあ」

会釈をすると、はっちいさんはこやかに微笑んだ。そしてそのまま別の芸人の元へと駆けてゆく。

「まだみたいなので、このへんで待ってれば大丈夫ですよ。それじゃあ」

「あ、はい。ありがとうございます」

見渡してみると芸人ごとに複数のかたまりができていている。かと思えば隣では数人の女性と芸人が友人のように話し込んでいた。紙袋を抱え直して深呼吸。

瞬きをすると、階段シックスティーンが見えた。既に

二人ほど女性が話しかけていて、スマートフォンで写真を撮っている。そちらに近づく、佐藤さんと目が合っ

た。後ろの潮田さんも対応を終えてこちらを見る。

「あの、ライブ面白かったです。よければこれ」

「あーありがとうございます！ お、潮田の好きなコーヒーじゃん」

「マジ？ ありがとうございます！」

「いえ！ あの、写真お願いしてもいいですか？」

「もちろんいいですよ。コンビニで撮ります？」

コンビニでお願いします、と告げると、じゃあスマホ貸してください写真撮ります、と二人の女性が手を差し伸べた。私の両側に佐藤さんと潮田さんが並んでいる。

「いきますよー。はい、チーズ」

「あつ、ありがとうございます！」

佐藤さんと潮田さん、それから撮ってくれた女性に敬礼を言う。いえいえ、またよろしくお願いしますと笑う佐藤さんの顔が眩しい。舞台衣装のワイシャツが暗がりの中でも光っている気がした。

「これからも頑張ってください。応援しています」

「ありがとうございます」

揃って笑顔で手を振られて、一瞬の逡巡の後に振り返す。幸せはこういう形でできているのかもしれない。

未だ賑やかな路地裏を抜け出して、駅まで大股で歩いていく。紙袋ぶん軽くなった身体が跳ねるように動く。緊張から解放された世界はこんなにも明るい。

『面白い奴らが集まるライブ』行ってきました！ 今日

いつも通り電子の海に眩きを投げ込んで、画像フォルダを見返す。少しためらって、編集して、自分の顔を隠して、もう一つ画像付きで呟く。

『出待ち快く受けていただいてありがとうございます。かつこよかった……』

『阿佐ヶ谷』のアナウンスに背中を押されて、電車からホームに足を運ぶ。毎月来ているおかげで何号車が出口までのアクセスに好都合かということまで覚えてしまった。

なぜ毎月最寄り駅でも仕事場でもない場所に向いているかという、トークライブだ。二時間階段シックスティーンが延々と喋るだけの、ファンしかいない内輪向けの空間。最前列に座ると首が痛くなってしまう規模の空間。登場して喋るだけで笑いが生まれる空間。

「こんばんは。田中で一枚取り置きしてます」

「はい田中さんですね。千円になります」

受付にはいつも通りさとーくんがいて、野口英世一枚をにこにこ受け取ってくれる。小学生のお小遣いレベルでこの男ふたりの時間を買うのだ。それも二時間。

狭い室内に置かれたパイプ椅子の連なりに、見知った顔が並んでいる。毎月来ているとそれなりに仲間意識が芽生えてしまいうらしい。あの人先月も見たなあ。あそこ

の人は最近全然見てなかったけど元氣そうでよかった。

三列目の通路側に腰掛けて、大きい袋を脇に置いた。

周りも大小それぞれの袋を抱えていたり置いていたり。目玉が飛び出るほど高いブランドのショッピングバッグを提げている人もいる。そういう人はだいたい拍手笑いをするし、大げさにうなずいて話を聞かし、SNSでは「かっこいい」と「尊い」と「かわいい」しか言わない。

ここにいる人全員が階段シックスティーンを愛している。その形は人それぞれで、たとえば毎日ライブに通う人、たとえば高額なプレゼントを渡す人、たとえばSNSで呟いたり動画の再生回数を伸ばす人、たとえばトークライブにだけ来る人、たとえばネタライブにだけ来る

人。それでもみんなひとしくおなじ。だから「本当にそれは愛なのか」と尋ねられても困るのだ。生ゴミを引張り出して確かめられても困るのと同じように。冬が似合うバンドの音量が上がって、ふと暗くなる。

「はいどうもー」

「こんばんは」

はじけるような元氣もなく、ぬるりと二人が舞台上に上がった。スーツも鳴りを潜めていて今は大きめのパーカーとデニム。しおちゃんはサルエルパンツ。割れんばかりの拍手が鼓膜を震わす。手が痛い。

「今月もありがとうございます。階段シックスティーン

のトークライブ、トークファクションです！」

阿佐ヶ谷の狭い狭いライブハウス、というかほぼ会議室みたいな殺風景な部屋が、歓声と拍手に包まれた。舞台袖では裏方をしている後輩芸人が様子を窺っている。

「皆さん先月の、先月？ あれもうちよつと前だったっけか？ この前の若手登竜門って放送いつだったっけ？」

「だいぶ前じゃね？」

「だいぶ前か！ すいませんテレビ久々なもんで。見ましたか若手登竜門、俺らめっちゃ滑ってたやつ」

「笑い声足されてたやつ」

そうそう、と笑うさとーくんの眉間に、ほんのわずかに皺が寄る。

「優勝してたコンビのネタもね。わりとテンポよくボケるやつで、俺らと真逆で動きも多くて」

「そうね」

「あーやっぱ賞レースってこういうネタの方が受けがいないな、って俺は思った」

そんなことない、と叫びたかった。そんなことはない、そのままのネタがみんな好きだよ。でも四十脚あ

るはずのパイプ椅子はいつだって空きがある。

二時間が風のように過ぎて、笑い過ぎてかわいた唇が震えている。何回経験しても出待ちは慣れない。今日は終演後の舞台に話しかけに行く形式だから余計だ。数人がさっさと舞台上上って、写真を撮ったりしている。

「あの、ライブ面白かったです。これよければ」

「あーいつもありがとうございます！」

人が捌けたタイミングを狙って舞台に足を載せると、フローリングの床が軋んだ。音が大きい。さとーくんとしおちゃんが笑顔で紙袋を受け取ってくれる。この一瞬のために生きている。

「あの」

「はい？」

からからの喉が鳴る。

「私階段シックスティーンの中のネタ大好きです。周り

と違う二人の世界があつて、すごく好きです」

だからやめないでください。今のままでいてください。とは、流石に言えなかった。数度まばたきした二人が、口の端をゆるませる。

「嬉しいです。ありがとうございます」

「いえ！ これからも頑張ってください」

「はい、応援よろしくお願いします」

お辞儀して狭い世界から飛び出す。駅に向かう足が自分のものでないくらいふわふわして、踏みしめるのもやっとなかった。好きだと伝えたのは初めてだ。喉を震わせて、唇の形を変えて、そうしてやっとなげ出した。

今日の一言で彼らが安心できればいい。一生の支えにしてほしいなんて思わない、ただ今日を生きる糧にしてくれればいい。売れないという不安に打ち勝つものの一つになればいい。それだけでいい。

中野駅周辺の人混みを掻き分けていると、ふと一年半前を思い出した。初めて出待ちをしたあの日は確か新宿だった。両手で大事に抱えていたコーヒーストップの紙袋は、シャツ一枚で諭吉が消える服屋のシンプルなロゴに書き換えられている。しおちゃんは服のこだわりがあるから渡せないけれど、さとーくんは基本的に渡したものをなんでも着る。私たちが選んだものに袖を通す。トークライブの日に着てくれたときは心臓が飛び上がるほどうれしかった。

自宅より落ち着く会場の入り口を潜り抜けると、見慣れた顔のスタッフが笑顔でチラシを渡してくれた。適当に受け取って鞆に仕舞い込む。通路側を陣取って座ると賑やかな入りの音楽が頭の中を通り過ぎた。

スマートフォンでスケジュールの最終確認。今日はこの後にしおちゃんと他の芸人のツーマントークライブがオールナイトであるけれど、残念ながら明日が早いので諦めたのだ。だから今日は紙袋も一つだけ、少し軽い。

「すみません、隣空いてますか？」
「空いてますよ。どうぞ」

高校生くらいだろうか、化粧つきのないおとなしそうな女の子がおずおずと隣に腰掛けた。パイプ椅子が軋んで音を立てる。ちら、と膝に乗せた紙袋に視線を向けられて、なんだかくすぐったかった。二百人入るかどうかの規模の会場では、紙袋がやけに大きく見える。私のお金で買ったものだから、何に使おうが私の勝手だけだ。

冬が似合うバンドのAメロが少しずつ大きくなる。今日は階段シックスティーンの主催ライブだから、出囃子はやっぱり彼らの好きなバンドだ。慣れた足取りで舞台上の真ん中まで闊歩する男が二人、大勢の視線を一身に

受けても飄々と佇んでいる。

「こんばんはー。階段シックスティーンの主催ライブ、「高額の漫才師」に来ていただいてありがとうございます」

笑ってみせるさとーくんの目元に影ができている。下から照明を浴びているせいかもしれないが、少し老けた気がする。

「このライブ写真撮影OKなんで、是非呟いて宣伝してね。それから今日のゲストは四則演算のお二人です。今ちよつと入りが遅れちゃってるけど……お互いに3本ずつネタをやります！ よろしくお願いします！」

四則演算はかわいがっている他事務所の後輩で、高学歴のコントで人気のコンビだ。少し前まではワンコインでネタを観られたことが信じられないほどに。隣の推定女子高生は、今日どっちを目当てるに足を運んだのか。

「賞レースも近いんでね、ちよつとバキバキのネタですよー」

賞レース。そろそろラストイヤーも近い二人だけど、準々決勝より上に駒を進めたことがない。毎年年末のトークライブで反省会をして、来年こそはと語り合う姿を何度も見てきた。こういうネタがいいのかな、自分達に足りないのはここじゃないかな、と配信でもよく話している。その度ネタは変わって、飄々としたかけ合いの漫才はコントのようなボケ漫才に形を変えつつある。

売れなければ安定しない。お金が入らない。夢がかなわない。階段シックスティーンが決めたことをするべきだ。わかってはいるのだけど、あの時かじりついたテレビの向こうの彼らと今の彼らが違って少しい悲しい。私が好きになったのは雑談のように進んでいく漫才で、今の漫才は賞レース用のよそ行きに見えてしまう。どち

らも同じ階段シックスティーンの漫才なのに。

「……あ、四則演算準備OKみたいですね。登場してもらいましょう、どうぞー！」

「どうもーよろしくお願ひいたします！ 四則演算と申しまーす！」

白シャツがやけに眩しい二人がはじけるように飛び出すと、わつと大きな拍手と歓声が起こった。照れくさそうに頭を掻くその顔は若い。アラサーも後半に突入したしおちゃんとさとーくんの横に並ぶと、余計に若い。

「えーめっちゃ人気じゃん！ ちよつと俺らのファンをとらないですよー」

茶化すように肩を小突くしおちゃんが、一瞬唇を噛んでいた。大丈夫だと言っただけだ。今ここにいる全員がなんて言えないけれど、少なくとも私は、私だけは階段シックスティーンで居続ける。ライブにも通い詰めるし、動画の再生数だって伸ばしてあげられる。配信だって欠かさず聞くと、事務所ライブの投票はいつでも一位にするし、リクエストライブでは必ず階段シックスティーンと書くし、欲しいものはなんでもプレゼントしてあげる。私はずっとファンでいる。

数万円するコートだって迷わず買った。自分では使ったことすらない加湿器だって。よくわからない店のコーヒーストとミルだって。ほしいと言うからなんでも買った。

カードを限度額まで使い込んだ。貯金を切り崩して毎日ライブに通い詰めた。昼食を抜いてそのぶんをライブ代に回した。自由時間を全てつぎ込んで彼らに充てた。

「じゃあさっそくネタに行きましょうか。どうぞー」
後悔はない。

心臓が浮立ってダンスしている。テレビの箱の前、舞台より小さな世界が色めくのを待っていた。

関東ローカルで毎週やっているお笑い番組に、数か月前から階段シックスティーンが出ている。頂上戦、なんて名前で煽られた大会で珍しく駒を進めているのだ。他の駒も劇場や舞台を主戦場に行っている人達なので、ライブの企画のように思えてしまう。それでもテレビで、地上波で彼らを見るのがうれしくて、録画もしているのに毎週リアルタイムで視聴していた。

「では始まりました。お笑い頂上戦！ いよいよ決勝です。各ブロックの優勝者が激突しますね！」

若い女性アナウンサーがにこやかに拳を握る。

「ここまでの予選も面白かったけど、決勝だからね！ より面白んじゃないかな」

司会の人気芸人がひとりうなずく。

「では出場する芸人さんを見ていきましょう！ みなさん、準備はどうですかー？」

かわいらしい声に反応する、張り上げた男の声。カメラが切り替わると、ガッツポーズや変顔をしている六組の芸人が現れた。芸歴数か月から十数年まで、無名から有名まで、節操がない。第三週目に勝ち上がった階段シックスティーンは真ん中に居て、カメラに抜かれやすい好位置を陣取っていた。久しぶりに顔を見る気がする。

「ばちん、と、しおちゃんと視線がぶつかる。カメラ越しに、液晶越しにこつちを見ている。そう思った人ってこの地球上に何人いるんだろう。かなしくなるほどきれいな顔だ。すっきりした一重まぶたと白眼が少しだけ主張する上三百眼。目の下の小さなほくろ。すべてが私を射抜いて、縛って、殺してしまう。」

「それではさつそく始めてまいります！ トップバツターはこのコンビです！」

煽りVは予選と変わらないようだ。自分大好きな王子様とそれに突っ込んでいく苦勞人のコンビ。ちよくちよくライブシーンで見かけてから、こんなキャラで根は真面目なところが好きになった。

次に出てきたのは作り込まれたストーリーが人気のトリオコント師。この番組にはよく呼ばれていて、毎回完璧に仕上げている。ほとんど無音のときもあるのに、突っ込みの顔芸が面白くて飽きさせない。

「……はい、得点集計が終わりました。どんどんいきましよう！ 三組目です！」

喉が鳴る。拍動が耳に伝わる。録画で何十回と見た煽りVでも、息をつめて見てしまう。緊張と期待が混ざり合った顔をしている彼らがいとおしい。コンビ名を読み上げたカットから画面が切り替わって、誰もいない舞台をマイクだけが護っている。

「はいどもー、階段シックスティーンです！」

飛び出してきた彼らはいつものスーツに揃いのネクタイをしつかり締めていた。きれいだ。何故だかわからなけれど、その光がきれいに思えた。

でも光は時に目を襲う。目を潰す。

両腕を大きく振り回したコミカルな動き。変だ。マイクから遠ざかって向かうは舞台袖。こうじゃない。言葉尻を捉えてばかりのギャグ銃弾。違和感しかない。喉を枯らすほど吠えるツツコミ。こんなものは知らない。割れんばかりに弾ける客席の笑い。拍手笑いをカメラに抜かれる司会者。お辞儀した彼らの身体を包む達成感。正解を見つけたような顔。誰だ。彼らは誰だ。

「いやー仕上げてましたね！ すごく面白かったです」

間の抜けた明るい声のアナウンサーに心の中で舌打ちをする。あなたはライブの小さな会場を、小学校クラスにも満たない客数のトークライブを、揮わない再生回数を表示するだけの動画を見ていましたか。彼らが十年磨いていた、大声も動きも少ない、マイク前からほとんど動かない立ち話みたいな漫才は好きでしたか。

「続いているコンビに参りましょう！ どうぞー！」

耳を通り抜ける出囃子歓声笑い声。どうしたらいいのかわからなかった。SNSは階段シックスティーンを賞賛する声で満ちていて、優勝もあるかも、やっど目の目を浴びるかもと色めきだっている。吐きそう。一組一組ネタを終えるたびに、これは本当に優勝するかもしれないとスマートフォンを持つ手が震えた。

今の階段シックスティーンが優勝したら、私の好きな彼らはどこに行くのだろう。誰に評価されるのだろう。やっど賞レースってこういうネタの方が受けがいいな、といつかの声が脳に打ち付けられた。

「……はい、六組のネタが終わりました！ 皆さんお疲れさまでした。それでは得点の発表を行います！」

「全員面白かったからね、誰がいつもおおしくない」部隊を埋め尽くすように集まる芸人たちの中で、少しだけ期待で顔を汚した階段シックスティーンがいた。周りの芸人も同じように指を組んでいた。芸人同士で肩を叩き合ったりしている。でも階段シックスティーンだけは、もしかして、が首をもたげている。背景のモニタ―が各コンビの名前を映し始めた。緊張ではない汗が止まらない。

「発表いたします。夏から始まったお笑い頂上戦、五十組の頂点に輝いたのは、」

「バチン、と存外大きな音を立てて、世界は消えた。」

年末年始に撮り溜めた録画を一通り見終えると、目頭がすこし痛んだ。指の腹で押さえてアイマスクを探す。蒸気で温めるやつがまだあったはずだ。よくライブの差し入れて買っていて、どんなものなんだろうと自分用にも買ったやつ。棚の奥に隠れていた箱を取り出すと、どこかに引っ掛けたのか棚の中が散乱した。

「紙だらけだな……」

つるつるした手触りのものをとりあえず全部引っぱり出す。事務所ライブに単独にユニットコントに昇格バトル。ダブっているチラシも結構多い。適当にクリアファイルに入れていたのだが、どうやら許容量を超えたあげくにバランスを崩したようだ。ダブっているものを除けて、残りを新しいファイルにしまった。

「まだ汚いじゃん」

被害は思ったよりも甚大。開き直って棚を散らかしたものを全て机の上に放り出した。数年分のチケットだ。端が折れていたり、何十枚かクリップで留めてまとめてあったり、発券機もバラバラ。

ざつとまとめて捲っていくと、どの出演者の欄にも階段シックスティーンがいた。彼らの主催ライブでもらえたステッカーもあった。懐かしいなど次々捲ると『笑人』の文字と84番が印字されているチケットがあった。あの日に見た光を、私は今も追いかけている。追いかけている？ 自分ではそのつもりだけど、光は本当に同じように今も輝いているのだろうか。

もちろん今もまだ階段シックスティーンが好きだ。賞レースの決勝でトロフィーを抱える彼らが観たい。ライブチケットの争奪戦が起きて、少しだけ寂しさを覚えた。でもそれ以上に、あの日の光のままでもいい。

階段シックスティーンは最近メディア露出が増えた。

関東ローカル局のお笑い番組で優勝してから、なんとなく他局でも顔を見るようになった。それに伴ってSNSでも彼らの名を見ることが増えてきたし、会場の客席数もちよつとだけ増えている。先月出待ちしたときには、見ない顔が多かった。

『はいどーもー階段シックスティーンです！ よろしくお願ひしまーす』

でもそれはボケが多くて、

『潮田があつちから来て俺にぶつかってよ。そしたら俺がカッコよくよけるからさ』

でもそれは舞台上をめいっぱい使って動いていて、

『いやなんで片足だけローラースケート履いてんだよ！』

お前左足の気持ち考えたことあんのか？ 足の格差社会じゃねえかよかわいそうに』

でもそれはあの日の光とは全然違う。

ひな壇に出ている彼ら。いびつなネタしている彼ら。

ライブのエンディングで、テレビ番組の宣伝が増えた彼ら。手放しに喜ぶべきだとわかつている。

ソファに置いてあったスマートフォンがぼん、と音を立てる。暗い画面に光をとると、トークライブの告知だった。今月も面白い話をしますよ、今年の賞レースに向けてネタも磨いていきますよと絵文字と共に綴られている。群がる数多くのリプライ、リプライ、リプライ。

『リメで一枚取り置きお願ひいたします。初めて行きます！ 楽しみです』

『この間テレビで見ながらファンです！ 耀で一枚取り置きお願ひします』

『ロケ番見ましたためっちゃ好きです……まからんで二枚取り置きお願ひできますか？』

耐え切れなくなつてアカウントを切り替えた。最近新しく作った、アイコンが真っ黒のアカウント。

『k i d n 16 やつぱり昔の方がいいよ……最近無理にボケてる感じがして好きじゃない。茶の間受けばかり考えるの嫌だなあ』

肺いっぱい息を吸い込んで、一気に吐き出す。机の上に並べられたチケットがこつちを見ている。ここに書かれている階段シックスティーンと、今の階段シックスティーン。私はどちらが好きなのか。

『好きだけど、好きだからこそ疑問が多い。口悪め』
固定にしていた自分の吹きが目に入る。好きだから。

そうだ、好きだからこんなにもやもやするし、疑問に思うし、吐き出したくなる。それに私だけではない。別の芸人について吐き出しているアカウントもあるし、彼らはもう駄目だと切り捨てるアカウントもあった。全員元々はファンだった。光を追いかけていた。その光が変わってしまったら、平静でいられなくなるのはあたりまえではないか。全ては愛ゆえに。愛、ゆえに。

チケットを棚の奥深くに押し込んで、その前をアイマスクの箱で塞いでしまう。捨ててもいいけれど燃えるごみの回収は明日じゃない。忘れかけていた目の痛みが顔を出してきたので、ついでにアイマスクで目を覆う。熱がじんわりと血行を促進して痛みが和らぐ。身体から力抜けていく。スマートフォンを握っていた指の力が弛緩して、世界とつながる板は机の上に寝そべった。ソファのクッションがスプリングして身体を包んでくれる。

目が覚めたら光が見えやしないだろうか。賑やかなテレビでチャンスをうかがっている顔ではなく、薄暗い空気を安い照明が照らす舞台上で楽しそうに笑う顔が。

結局トークライブの取り置きは頼まなかった。

世界を遠ざけても存在は消えない。たとえばスマートフォンやテレビを消しても、チケットを仕舞い込んでも、布団をかぶっても世界はそこにある。私の手のひらの中にはない。瞳の中にはない。新宿、中野、池袋、高円寺、阿佐ヶ谷、下北沢、そこにはない。世界があるのは私の頭の中だ。そこだけだ。

こめかみに五寸釘。
瞼を下ろすとあの日の歓声と拍手が耳に響いてきそう
でこわかった。

誰も悪くない。売りたいと願うことも、食欲に笑いを求めることも、ネタのスタイルを変えることも、それを認めることも評価することも好きになることも、何も悪くないのだ。でも誰も何も悪くないのなら私もその仲間に入れてくれやしないだろうか。好きなものが形を変えたことを受け入れられない私を。

死に向かってひた走る鼓動。
好きだったのだ。淡々と広げられる雑談のような漫才も、真ん中でつめたくなる存在を主張するサンパチマイクの周りから動かないところも、爆音の出囃子にかき消されそうになるほどの音量も、好きだ。好きだった。好きだ。深夜に突然始まる、両手で足りるほどの人しか見えない配信。空席ばかりのパイプ椅子。彼らに付随しているからそれらが好きなのか、付随しているから彼らが好きなのか。

私を救ったのは階段シックスステイオンだけど、その他大勢と同じようなネタをする階段シックスステイオンではない。そんな線がぶれたまがいものを追いかけていた記憶はない。曲がったネクタイを愛していた。

携帯を開けば丑三つ時。

眠れないなあ、と身体を起こして、冷蔵庫を開ける。

ドアポケットから透明のペットボトルをさらった。新しいキャップを開けるときの、ぱき、という乾いた音が暗い部屋に響いて消えてゆく。透明に覆われている透明が揺れた。跳ね返す質量を持った音とかるい柔らかない音。

ボトルを傾けると、何の抵抗も引つ掛かりもなく唇が湿る。熱を帯びていた口腔を冷やして喉を滑った。時間がたてば目が覚めるような冷たさはすつかり消える。

こめかみのあたりを指で押さえると、少しだけ楽。結露をまとい始めたペットボトルのお腹を拭いて、曇りを消していく。指の腹とこすれあつてキュッと無機質な音を立てた。体温がボトルをしつかりと握りしめていくはずなのに、手のひらばかりが冷えて濡れていく。

もう一度ボトルを傾ける。ボトルに縋りきれなかった結露が指を伝った。無味無臭。当たり前か。喉を鳴らすと胃まで到達して、じんわりと冷たさが広がる。勢いよくあおると私の口から空気がこぼれて、ごぶつと鈍い音を立てた。透明が一瞬だけ乱れる。泡が消えると、再びしんと静まった。

ベッドに腰かけて。ペットボトルを揺らす。あと半分あるかどうか、というところまで減っていた。よくわからない意地を張って口づけていると、だんだん境目がぼんやりと歪んでいく。硬くて冷たかったはずの飲み口が熱でにじんでしまったみたいだ。どこまでが私の唇でどこからがペットボトルのプラスチックか。あわいがとけていく。

五寸釘が一本ずつ引き抜かれていく。
背を反らしてボトルを完全に立てると、重力に従って
かんとんに飲み切れてしまった。空っぽから口を離すと、
お腹が膨れた私が輪郭をとりもどす。

ラベルを指でなぞって、カーテンの隙間を広げる。街灯と近隣住宅の光に照らされて、文字がはつきりと認識できた。アルプス。行ったこともないし、見たこともない。名前しか知らない山の宣伝文句に、私たちは期待を寄せて購入する。勝手なイメージをアルプスに持たせて、好きとか嫌いとか感情をくつつけてしまう。そういうものなのかもしれない。

ペットボトルを照らしている光は、他でもない誰かが活動しているしよめいだ。仕事か、家事か、趣味か。顔も名前も知らない誰かが息づいている証拠は、窓越しにきらめいている。きれいだと思つた。舞台のスポットライトとは違うけれど、確かにきれいだと思つた。

階段シックスステイオンは、今後この光を増やしていくのかもしれない。舞台のスポットライトを浴びる回数が減つても、テレビの光を、あるいは家の灯りをともして彼らを見る人が増えるのかもしれない。いつかの私がそうだったように。

そして私は電気を消して、テレビを消して、彼らから離れるのかもしれない。その方がいいのかもしれない。変化を拒んで、私が望む階段シックスステイオンの形を押し付けてしまうことは、彼らにとって何の役にも立たないから。唇をかみしめると、二人を思い出した。そんな姿を見続けたいわけではない。そういうわけではない。

適当にいろんな人を好きになつて適当にネタを見て、わあ面白いつて、それだけ感じていれば楽だった。自分の好きな形ではなくなつたらあつさり次を見つけれられるような、そんなお手軽インスタント感情だったらどれだけ楽だっただろう。二文字で言い表せられるような感情なんかとうに超えてしまっているのに。

でもそうじゃないから、私はあの日救われた。

仕事場と自宅の往復を再開して、どのくらい経つただろうか。都心は季節が分からない。春夏秋冬ビル群の間からわずかな空が見えるばかりで、あとはなにもない。寒いも暑いも外に出なければわからない。

「田中さん、この後空いてる？」

よければ「飯でも」と続ける声に、いつか声をかけていただいたことを思い出した。

「空いてますよ。ぜひ行きましょう」

「お、よかったー。前は忙しそうにしてたもんね」

落ち着いたみたいでよかったよ、と嬉しそうに笑っている。落ち着いたのだろうか、私。

階段シックスティーンが嫌いになったわけではない。

相変わらず大きな賞レースは勝ち進めていないことも知っているし、ライブの取り置きを求めていることを知っている。でも今日どこでライブをやっているのかも、明日何のライブに出るのかも知らない。それだけだ。

「着替えたら玄関口で待ってるから」

「わかりました」

更衣室に消える人影を目で追って、私も着替えようと立ち上がる。更衣室のドアノブを回すと、ちょうど先輩とすれ違った。お疲れ様です、と会釈すると目を見開いている。

「そっだ田中さん、あれ見たよ。なんだっけ、階段シックスティーン？ 面白かった！」

会うたびに言いそびれちゃってた、と照れくさそうに先輩が笑う。何年前に勧めたのか私も覚えていない。それでも覚えてくれていたこと、見てくれたことがうれしかった。何年前かの私、よかったなあ。あの頃聞いていたら一緒にライブに行きませんかと言えたかもなあ。

「ありがとうございます。面白いですよね」

「ね！ 動画サイトにあがってるやつ全部見ちゃった」

最近階段シックスティーンが始めたらしい公式チャンネルのことだろう。どのネタが上がっているんだろう。どのネタを見たんだろう。

「……あつごめんさい。今日時間ないんだった」

「あーごめん引き留めちゃって！ またね」

「お疲れさまです」

更衣室には誰もいなかった。自分のロッカーに荷物を置くと、通知音がかすかに聞こえる。

「だれ？」

確認すると、ほとんど稼働していないアカウントの通知だった。今日のライブまだ取り置きできますよ、と。

久々に見た。通知を切っているつもりだったのに。物事は重なるものなのかもしれない。

アカウントを切り替えて、真っ黒のアイコンを見下ろす。納得できていない気持ちがつらつらつらつらと綴られていた。最後に嘆いたのは数か月前。画面を指先でなぞってアプリケーションを眠らせる。

アカウントみたいに気持ちも切り替えられればいいのに。何年か前に毎月会っていた本名だって知らない女性たちは、もうまったく別の人を追いかけていたり、アカウントを消していたり、界限を変えていたりしている。

消化しきれたわけではない。離れるという決断が正解かどうか分からない。それでも変わりゆく存在に普遍性を求めることだけは不毛だと認める。私を救ってくれた光を彼らに背負わせることは重荷だ。人格化だ。偶像崇拜に愛なんて読み方は存在しない。執着は恋と呼べない。それでも、と立ち止まる。人間二人に光を見出したことに後悔もない、と言ったら怒られるだろうか。

ジャケットに袖を通してると、別の通知音が響く。『玄関口にいます』

頭からすっぽ抜けていた。『了解しました』とだけ返して、靴の口をしめる。更衣室の扉を開けると、なんとなくすっきりした。ヒールでリノリウムを踏みしめながらエレベーターのボタンを押すと、待っていたといわんばかりに私を飲み込んでくれる。このまま玄関口まで下れば外に吐き出され、居酒屋だかレストランだかの門をくぐり、そして自宅の扉を開ける。こんな感じの毎日が続けていけば、感情も消えてくれるような気がした。デリートキーを押すように、砂浜の絵を波がさらってしまうように。

「ん？」

エレベーターが動かない。おや、と思つてボタンを見ると、階数ボタンがすべて暗いままだった。思わず顔をしかめる。

「バカか」

閉めたり開けたりするだけじゃあ駄目なんだ。一階のボタンを押して壁に凭れると、鈍くひくい音を立ててエレベーターが下がっていく。ゆっくりと地上がわたしに近づいていく。豆粒みたいだった人たちが輪郭線を帯びていく。空よりもビル群の窓の方が明るい。名も知らない顔も知らない人がこうこうと灯りをともしている。

がこん、と大きな音を立ててエレベーターが止まり、扉が開いた。見慣れた顔が玄関口で所在なさげにうろついている。一步外へ踏み出すと、受付の眩しい照明にくらぐらした。ジャケットの襟を直す。一瞬だけ、世界が重なった。瞬きして消し去る。にじんだふちどりが明瞭になって、やつと一つの世界が見える。世界なんてあつという間に終わるのだ。